ISSN 0910−2396

野鳥だより

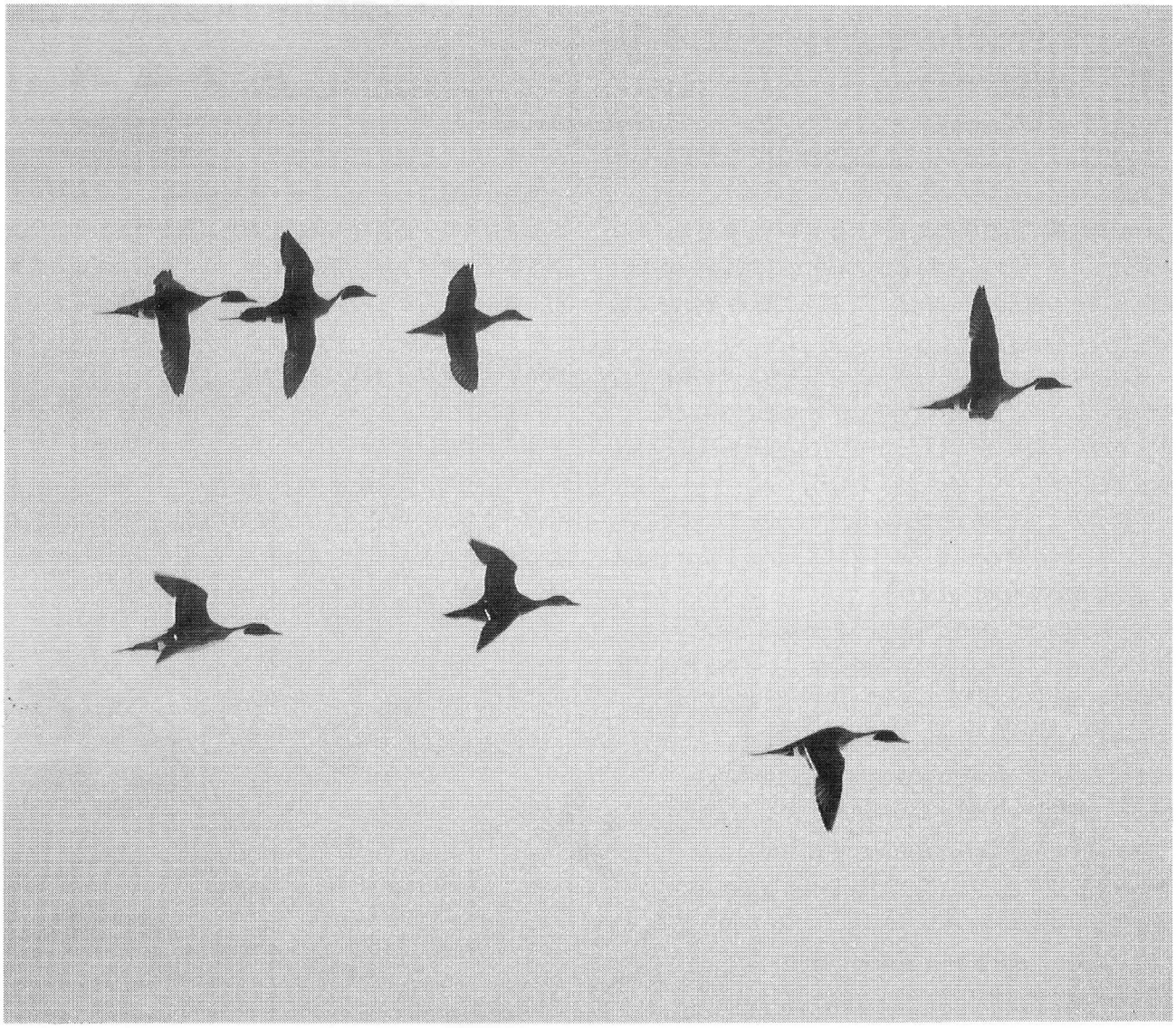
—北海道—

第 126 号

編集・発行　北海道野鳥愛護会

発行年月日　平成13年12月21日

オナガガモ



1999.12.30　ウトナイ湖　撮影者　猪口　卓

〒002−8071　札幌市北区あいの里１条６丁目３－４－906

もくじ

私の探鳥地（41）「豊平川」
ミュンヘン大橋からJR苗穂鉄橋まで
戸津　高保 …… 2
春採湖の野鳥　釧路市立博物館
橋本　正雄 …… 3
昭和初期の野幌国有林の野鳥
－１冊の調査報告書から－　樋口　孝城 …… 6
野鳥愛護会のホームページについて
高橋　良直 …… 9
会員の札幌市集中化傾向について
広　報　部 …… 10
探鳥会ほうこく …… 10
探鳥会あんない …… 13
鳥民だより …… 13

私の探鳥地（41）「豊平川」

ミュンヘン大橋からＪＲ苗穂鉄橋まで

戸　津　高　保

私はミュンヘン大橋からJR苗穂鉄橋までの豊平川を毎月２回、ウオッチングをして、楽しんでいます。

自転車で豊平川右岸のサイクリングロードを走り、ここで観察した鳥を記録しています。現在、この観察を始めて、12年目に入りました。これまでに２回、「野鳥だより」にも報告しています。

平成２年の６月に、このバードウオッチングを始めたのですが、私なりに新しい発見や、野鳥の生活の変化など、考えさせられる問題が次々と出てきて、現在も観察を継続中です。

特別、めずらしい鳥が現れる場所ではないのですが、春には、ヒバリ、イソシギ、イワツバメ、アオジなどが元気な姿を川原に見せてくれます。

イワツバメは、以前よりかなり数が減った感じですが、毎年、南９条橋の橋げたに巣づくりをし、子育てをしています。イソシギは豊平川に来ると、さわがしく鳴きながら水面を飛びまわります。これまで、これほどにぎやかな鳥だとは知りませんでした。繁殖期の行動ですねー。

冬には、札幌市の中心部を流れる豊平川にカワアイサが出現するとは、この観察を始めるまで、思ってもいませんでした。

今年の夏、（８月２日）豊頃町の十勝川で、50羽程のカワアイサを見ました。十勝川では繁殖しているんでしょうか。

同じく冬には、ツグミ、シロカモメ、ホオジロガモなどが、時々姿を見せてくれます。

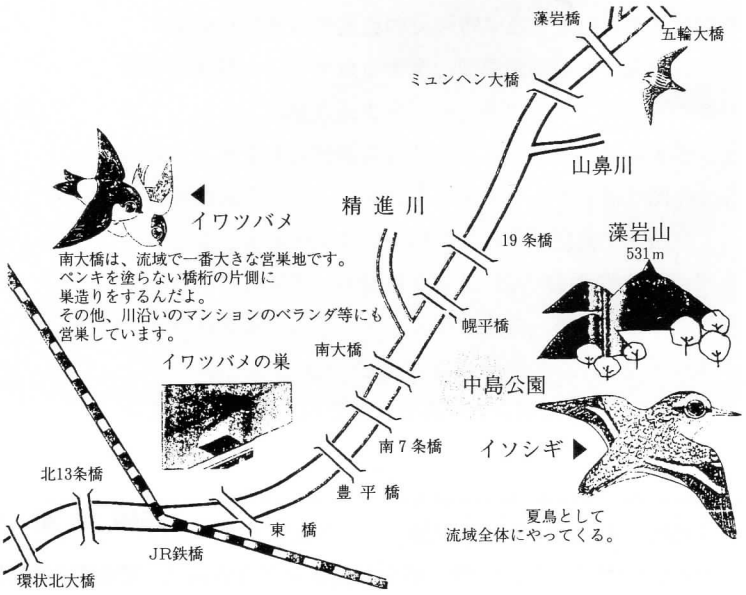
また、春と秋の渡りの時期には、コヨシキリ、メボソムシクイ、ベニマシコ、ダイサギなどがこの豊平川を通過して行きます。オジロワシも毎年２月頃、この地域に出現します。

最近、特徴的なのは、平成７年に始めてここに現れたオオセグロカモメが、その後、だんだん数が増えてきて、ここ数年は、ほぼ１年中、相当数が、私の観察している豊平川に飛んでくることです。

サケの稚魚やホッチャレ、また豊平川に多く見られるウグイやフクドジョウなどを食べにくるのでしょうか。

年中豊平川にいるマガモと多くなってきたオオセグロカモメとの関係はどうなのだろうなどと考えてしまいます。

これまでに、ここで確認した鳥の合計は57種類になりました。機会があれば、「野鳥だより」に、その後の記録を含めて報告したいと思っています。当分、この豊平川ウオッチングは続けることになりそうです。



春採湖の野鳥

釧路市立博物館　橋本正雄

春採湖は周囲約5kmの天然湖で、釧路市の中心部近くにあります。赤いフナ「ヒブナ」が生息することで全国的に知られ、1937（昭和12）年に「春採湖ヒブナ生息地」として国の天然記念物に指定されています。

周辺は住宅地となっていますが、湖畔には、雑木林、草原、ヨシ原などが自然に近い形で残っており、野鳥たちにとっては貴重な生息場所となっています。ことに、1975（昭和50）年に日本では冬鳥であるホシハジロが繁殖していることが発見されると、日本唯一の繁殖地として全国区の知名度となりました。

森林の鳥、草原の鳥、水辺の鳥、さらに海がごく近いことから海鳥と、街中にもかかわらずバライティーにとんだ野鳥が生息し、湖畔を小一時間も散策すると、30種ほどの鳥に出会うことができます。そして、近年は野鳥を愛する人が増えたせいでしょうか、鳥が人をあまり恐れなくなってきており、間近から小鳥の囀る様子や、水鳥の子育ての様子などを観察することができます。

ところで春採湖には、長い間、周辺から約2万人分もの生活廃水が流れ込み、水質汚染が著しく進み、1991（平成3）年には環境庁による公共用水域水質測定結果で千葉県の手賀沼とともにワースト1になるという不名誉なことが起きました。しかし、その後の大規模な浄化対策が効果をあげ、湖が生き返るとともに、以前に増して多くの市民がウオーキングに、ランニングに、また野鳥や草花の観察にと訪れるようになっています。

【これまでに見られた野鳥】

筆者は1971（昭和46）年から春採湖で野鳥観察を行ってきましたが、2001年9月までに158種の野鳥に出会うことができました（表－1）。

それらの鳥を移動習性から大まかに分類すると、夏鳥がカイツブリやノビタキなど59種（37%）、留鳥がマガモやシジュウカラなど37種（23%）、冬鳥がミコアイサやツグミなど30種（19%）、旅鳥がアジサシやエゾビタキなど23

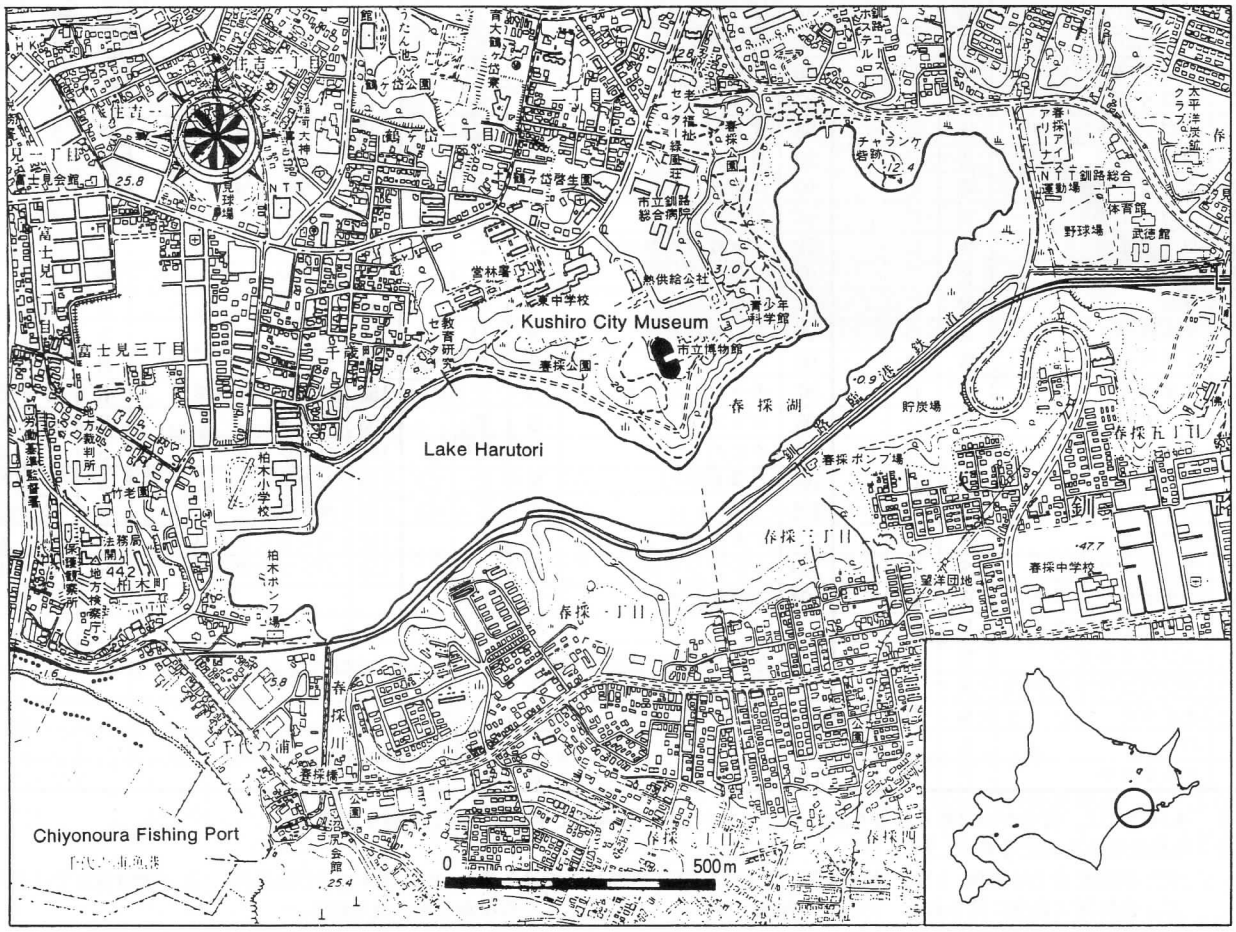


図1　釧路市春採湖

表－1　春採湖鳥類目録

番号	種　　名	生息状況		繁殖	番号	種　　名	生息状況		繁殖	番号	種　　名	生息状況		繁殖
1	アビ	P	U		56	オオバン	S	C	◎	111	ツグミ	W	C	
2	シロエリオオハム	P	U		57	ハマシギ	P	U		112	ウグイス	S	O	
3	カイツブリ	S	C	◎	58	ツルシギ	P	U		113	エゾセンニュウ	S	C	◎
4	ハジロカイツブリ	P	U		59	アオアシシギ	P	U		114	シマセンニュウ	S	C	◎
5	ミミカイツブリ	P	U		60	タカブシギ	P	U		115	マキノセンニュウ	S	U	
6	アカエリカイツブリ	S	U		61	キアシシギ	P	U		116	コヨシキリ	S	C	◎
7	ハイイロウミツバメ	W	U		62	イソシギ	S	C	○	117	オオヨシキリ	S	U	
8	コシジロウミツバメ	S	U		63	オオジシギ	S	C	○	118	メボソムシクイ	P	U	
9	ウミウ	S	U		64	セイタカシギ	A	U		119	エゾムシクイ	S	C	
10	ヒメウ	R	U		65	アカエリヒレアシシギ	P	U		120	センダイムシクイ	S	C	
11	コグンカンドリ	A	U		66	ユリカモメ	P	C		121	キクイタダキ	R	U	
12	アマサギ	A	U		67	セグロカモメ	W	C		122	マミジロキビタキ	A	U	
13	ダイサギ	A	U		68	オオセグロカモメ	R	C		123	キビタキ	S	O	
14	チュウサギ	A	U		69	シロカモメ	W	U		124	オオルリ	S	O	
15	コサギ	A	U		70	カモメ	W	C		125	サメビタキ	S	U	
16	アオサギ	S	C		71	ウミネコ	S	C		126	エゾビタキ	P	U	
17	コクガン	P	U		72	ミツユビカモメ	W	U		127	コサメビタキ	S	O	
18	オオハクチョウ	W	O		73	アジサシ	P	O		128	エナガ	R	O	
19	コハクチョウ	W	U		74	セグロアジサシ	A	U		129	ハシブトガラ	R	C	◎
20	オシドリ	S	U		75	コアジサシ	A	U		130	コガラ	R	U	
21	マガモ	R	C	◎	76	キジバト	S	C		131	ヒガラ	R	C	
22	カルガモ	S	U		77	アオバト	S	U		132	ヤマガラ	R	O	
23	コガモ	W	C		78	カッコウ	S	C	○	133	シジュウカラ	R	C	◎
24	ヨシガモ	W	C		79	ツツドリ	S	U		134	ゴジュウカラ	R	C	◎
25	オカヨシガモ	P	U		80	トラフズク	R	U		135	メジロ	S	O	
26	ヒドリガモ	W	C		81	コミミズク	W	U		136	ホオジロ	S	U	
27	オナガガモ	W	C		82	フクロウ	R	U		137	ホオアカ	S	U	
28	シマアジ	P	U		83	ハリオアマツバメ	S	O		138	カシラダカ	P	U	
29	ハシビロガモ	W	C		84	アマツバメ	S	C		139	ミヤマホオジロ	P	U	
30	ホシハジロ	R	C	○	85	カワセミ	S	U		140	シマアオジ	S	U	
31	キンクロハジロ	W	C		86	アリスイ	S	U		141	アオジ	S	C	◎
32	スズガモ	W	C		87	ヤマゲラ	R	O		142	クロジ	S	U	
33	ビロードキンクロ	W	U		88	アカゲラ	R	C		143	オオジュリン	S	C	
34	コオリガモ	W	U		89	コアカゲラ	R	U		144	アトリ	W	O	
35	ホオジロガモ	W	C		90	コゲラ	R	O		145	カワラヒワ	R	C	◎
36	ミコアイサ	W	C		91	ヒバリ	R	C	◎	146	マヒワ	R	U	
37	ウミアイサ	W	C		92	ショウドウツバメ	R	C	△	147	ベニヒワ	W	U	
38	カワアイサ	R	C		93	ツバメ	S	U		148	ハギマシコ	W	U	
39	トビ	R	C	○	94	イワツバメ	S	U		149	ベニマシコ	S	O	
40	オジロワシ	R	O		95	キセキレイ	S	U		150	ウソ	S	O	
41	オオワシ	W	O		96	ハクセキレイ	S	C	◎	151	シメ	R	C	
42	オオタカ	R	U		97	セグロセキレイ	S	U		152	ニュウナイスズメ	S	O	○
43	ハイタカ	R	O		98	ビンズイ	S	U		153	スズメ	R	C	◎
44	ケアシノスリ	W	U		99	タヒバリ	P	U		154	コムクドリ	S	C	◎
45	ノスリ	R	U		100	ヒヨドリ	R	C	○	155	ムクドリ	S	O	
46	ハイイロチュウヒ	W	U		101	モズ	S	C	◎	156	カケス	R	C	
47	ハヤブサ	R	U		102	アカモズ	S	U		157	ハシボソガラス	R	C	◎
48	チゴハヤブサ	S	U		103	キレンジャク	W	O		158	ハシブトガラス	R	C	◎
49	コチョウゲンボウ	W	U		104	ミソサザイ	S	U						
50	チョウゲンボウ	P	U		105	ノゴマ	S	O	○					
51	エゾライチョウ	R	U		106	ルリビタキ	S	U						
52	キジ（コウライキジ）	R	U		107	ジョウビタキ	W	O						
53	クイナ	S	O	◎	108	ノビタキ	S	C	◎					
54	バン	S	C	◎	109	アカハラ	S	O						
55	ツルクイナ	P	U		110	シロハラ	P	U						

註１　本目録には、橋本が1971年６月より2001年９月までの間に春採湖で生息を確認した種を記載した。

註２　生息状況は次の記号で示した。

R：釧路地方では留鳥　S：釧路地方では夏鳥　W：釧路地方では冬鳥　P：釧路地方では旅鳥　A：釧路地方では迷鳥

C：春採湖で普通に見られる　O：春採湖で時折見られる　U：春採湖で希に見られる

註３　繁殖状況は次の記号で示した。

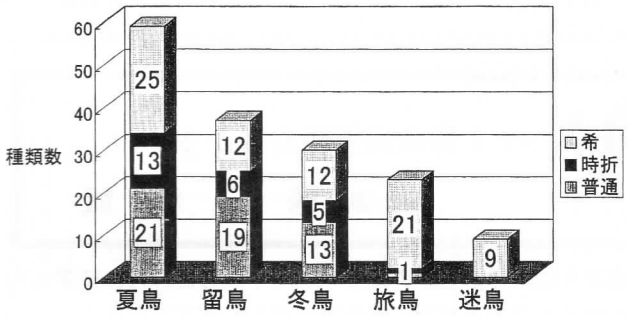
◎：ほぼ毎年繁殖する　○：不定期に繁殖する　△：繁殖したことがあるが、現在は繁殖しない

表－2　春採湖における鳥の生息状況

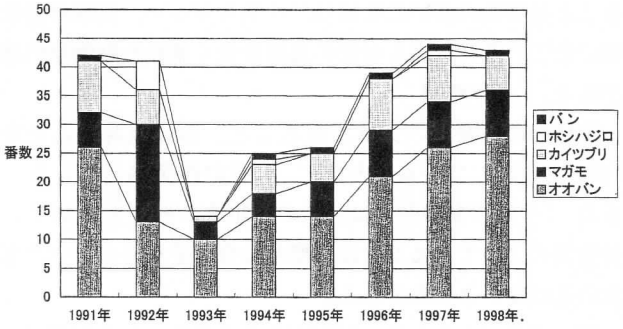
	普　通	時　折	希	計
夏鳥	21	13	25	59種(37%)
留鳥	19	6	12	37種(23%)
冬鳥	13	5	12	30種(19%)
旅鳥	1	1	21	23種(15%)
迷鳥			9	9種(6%)
計	54種(34%)	25種(16%)	79種(50%)	158種

註　この表は表－1の鳥類目録より作成

図－2　春採湖における鳥の生息状況



図－3　春採湖における水鳥繁殖状況



種（15%）、迷鳥がセグロアジサシやマミジロキビタキなど9種（6%）となります（表－2、図－2）。また、出現頻度から分類すると、普通に見ることが出来る鳥（54種、34%）時折見ることが出来る鳥（25種、16%）、希に見ることが出来る鳥（79種、50%）となります（表－2）。

希に出現する鳥が50%を占めているように、市街地にある湖のためでしょうか、移動の途中にちょっと立ち寄り休息する場所として、野鳥たちによく利用されていることが分かります。

表－3　春採湖で繁殖する水鳥の確認番数とヒナ個体数（前田・橋本　1999）

種　名	1991		1992		1993		1994		1995		1996		1997		1998	
	番	ヒナ	番	ヒナ	番	ヒナ	番	ヒナ	番	ヒナ	番	ヒナ	番	ヒナ	番	ヒナ
カイツブリ	9	6	6	10	1	4	5	17	5	14	9	27	8	20	6	11
マガモ	6	30	17	80	3	14	4	26	6	38	8	53	8	43	8	30
ホシハジロ	0	0	5	20	0	0	1	2	0	0	0	0	1	1	0	0
バン	1	5	0	0	0	0	1	1	1	2	1	2	1	3	1	3
オオバン	26	55	13	26	10	15	14	60	14	45	21	56	26	86	28	76
計	42	106	41	136	14	33	25	106	26	99	39	138	44	153	43	120

【野鳥の繁殖状況】

春採湖では、これまでに30種の鳥の繁殖が確認されています（表－1）。そのうち、カイツブリ、マガモ、クイナ、バン、オオバン、ヒバリ、ハクセキレイ、モズ、ノビタキ、エゾセンニュウ、シマセンニュウ、コヨシキリ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、アオジ、カワラヒワ、スズメ、コムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラスの21種はほぼ毎年繁殖します。ホシハジロ、トビ、イソシギ、オオジシギ、カッコウ、ノゴマ、ニュウナイスズメなどは時折というか、不定期な繁殖となっています。また、繁殖確認はできていないのですが、キジバト、センダイムシクイ、ヒガラが繁殖期を通して生息するようになっており、繁殖の可能性が高くなっています。

水鳥ではカイツブリ、マガモ、ホシハジロ、バン、オオバンと5種が繁殖しますが、繁殖数はオオバンが飛びぬけて多く、番数は30近くと、これほど高密度でオオバンが繁殖する場所は全国的に珍しいといえます（表－3、図－3）。ホシハジロは1975年以来、日本唯一の繁殖地として毎年1～2番が繁殖してきましたが、1998年以降、ヒナが確認されず、繁殖が途絶えたのではないかと心配されています。

オオバンの親子

【野鳥と市民】

日本野鳥の会釧路支部と釧路市立博物館では、この20数年間にわたり春採湖畔において、4～11月までの毎月1回、市民を対象に探鳥会を開催してきました。近年は探鳥会に関心を持つ市民がずいぶんと増えたことと、また街中で集まり易いこともあり、毎回、30～40人の参加があります。

春採湖の探鳥地としての良さは、先にも述べましたが、鳥類相がバライティーに富んでいることと、人に対して馴れていることから、参加者が多数いてもさほど鳥が警

戒しないということです。

湖畔に多いコヨシキリなどは、人が近づくと、わざわざ数m先のヨシの穂先に出てきて囀りだすほどです。アオジも止まっている枝の真下に人がいても、平気で囀っています。巣箱を利用するシジュウカラやコムクドリなどは、人目を気にすることなくせっせとヒナに餌運びを続けます。マガモやオオバンは、人が近づくと餌をもらおうと親子で寄って来ます。

こんな光景を見るにつけ、かつては猟犬を湖に放して訓練する人や、鳥に石をなげる子どもがいたことを思い、なんと素晴らしいことかと一種の感動を覚えます。

【引用文献】

橋本正雄　1994. 北海道東部，釧路市春採湖の鳥類．釧路市立博物館紀要，18：33－44.

前田紀子・橋本正雄　1999. 釧路市春採湖における水鳥の繁殖状況．同上，23：7－12.

日本鳥学会　2000. 日本鳥類目録，改訂第6版.

〒085-0822　釧路市春湖台1番7号　釧路市立博物館

昭和初期の野幌国有林の野鳥 ― 1冊の調査報告書から ―

広報　樋口孝城

昭和11年に北海道林業試験場が発行した「野幌国有林内の動物調査書」がある。旧漢字、旧仮名遣いで書かれているが、ここでの紹介は現代の漢字と仮名遣いにする。

扉には「本報告は北海道庁嘱託北海道帝国大学農学博士犬飼哲夫をして調査せしめたる結果にして参考に資するものあるを以て茲に印刷に附す　昭和十一年五月　北海道林業試験場」と書かれており、ヒグマを初めとした北海道の動物の研究や、南極探検隊のカラフト犬の育ての親として名高い故犬飼哲夫博士による調査書であることが示されている。

続いて犬飼博士による緒言が書かれている。その最初の部分を以下に紹介すると。

『北海道の開拓は既に六十余年の歴史を閲し、千古斧鉞の跡を見なかった全道を蔽っていた、鬱蒼たる大森林は薙ぎ倒す如くに伐り開かれて、山岳地方を除いては昔の北海道を偲ばしむる原始林は殆ど現今では見られなくなった。斯かる時に開墾の濫觴の地であり、且最も進歩した石狩平原の一部に野幌国有林が原始林を併せ存在することは、各方面に於ける林業の基本試験を最も徹底せしむることは言を俟たないが、森林動物の研究にも最も便宜且効果的である。(以下略)』

難しい漢字が並び、私には読解不能のものも少なからずあるが、北海道開拓から60年余りで、多くの原始林が姿を消していくなかで、野幌原始林が貴重な存在であることがうかがえる。

この動物調査書は約50ページであるが、そのほぼ半分が鳥類について費やされている。鳥類の部の最初は以下のような文章から始まっている。

『野幌国有林内に棲息する最も顕著な動物は鳥類である。山田農学士は嘗て昭和六年四月から九月迄林内の鳥類を調査したことがある。余等は昭和八年八月より調査を開始し現在も引続き調査中であるが、本年六月迄に得た結果に山田学士の研究を参照して此処に報告しようと思う。

野幌国有林に居る鳥類は大体において札幌付近に棲む鳥類と異なることがないことは言う迄もないが、種類の豊富なこと及び数の多いことは他に比類を見ない。夏期の繁殖期にはこの森林は宛も付近の鳥類を悉く集めた動物園の感がある。(以下略)』

全体的に格調高い文章であること、自分自身のことを「余」と表現していることなど、今昔の観を感じさせる。また、「夏期の繁殖期には付近の鳥類をことごとく集めた動物園のようである」とは実際どんな様子なのか、少々想像の及ばないところである。

続いてリストとなり、野幌国有林の鳥類として80種があげられている。それらの種名と説明を以下に示す。種名については往時を偲ぶために旧仮名遣いのままにしたが、説明については現代の漢字・仮名遣いに直してある。なお番号は私が便宜的につけたものである。実際のものは種名、学名、説明を列挙したものであるが、ここでは学名を省略するとともに、表の形に書き改めた。

リストに並べられた鳥の順序は当時の分類順に従ったものであるが、スズメ目のカラス類が最初に来るなど、現在の分類順とはかなり違うものである。また、実際の報告書にはそれぞれの鳥の学名が書かれているが、これについても、現在の学名と異なるものがかなりある。それらについて細かく述べていくことは煩瑣になるので、それら以外に私自身が気づいたことをいくつかあげてみよう。

15番目のカラフトスズメとあるのは今のスズメのことである。2番目のエゾハシブトガラスについてもそうであるが、当時の亜種の取り扱いについては、古い文献を調べるなり、博学の徒に尋ねるなりしないと明確なことはわからない。鳥名についても、3番目のホシガラスは別名タケガ

野幌国有林内及びその付近における鳥類目録

1	ハシボソガラス	四季を通じて棲息、少数、雑食性。
2	エゾハシブトガラス	四季棲息、極めて少数、悪食性。
3	ホシガラス（タケガラス）	昭和10年９月11日初めて林内にて発見す。
4	ミヤマカケス	四季棲息、多数、主として植物性食なれども、他鳥の卵及び雛を襲う。
5	ムクドリ	４月－11月、多数、越冬するものがある。昆虫を食う益鳥。
6	コムクドリ	４月下旬－９月下旬、ムクドリより少数、昆虫を食うが、果実も食う。
7	シメ	４月下旬、少数、夏期は昆虫を食するが、穀物、種子、木の新芽を啄む。
8	イカル	６月－10月、少数、主として穀物、種子、木の芽等を食う。
9	オホカワラヒワ	２月下旬－10月、稍多数、植物性食物。
10	マヒワ	３月－11月、冬期でも群棲するものあり、種子及穀物、木の新芽を食う。
11	ベニマシコ	４月中旬及10月下旬に少数を見る。草の実、種子、蕾、芽を食う。
12	ウソ	10月－１月に特に多数群る。種子及穀物食。
13	イスカ	５月中旬に群棲するのを観察、種子及穀物食。
14	アトリ	２月及10月に小群を見る。松の実、種子、木の新芽を食う。
15	カラフトスズメ	四季棲息、主として林縁に棲む。種子及穀物食。
16	アヲジ	４月中旬－10月下旬に現わる。多数、夏期繁殖期以外は90％植物性食物。
17	ホホジロ	４月中旬－10月下旬に見る。少数、主として昆虫を食う。
18	ホホアカ	４月中旬－９月下旬に見る、稍多数、夏期は昆虫なるも草実、穀物も食う。
19	ヒバリ	３月下旬雪積ある時より10月下旬迄林縁に棲息。多数、昆虫及雑草の種子を食う。
20	ビンズイ	４月下旬－10月中旬、少数、主として昆虫、クモ類、僅かに種子を食う。
21	ハクセキレイ	３月下旬－10月中旬、稍多数、昆虫類を食う。
22	キセキレイ	５月中旬－10月中旬、少数、昆虫類を食う。
23	シロハラゴジフカラ	四季棲息、稍多数、主として昆虫を食い稀に果実、穀物を食う。
24	シジフカラ	四季棲息、稍多数、主として昆虫類を食い往々雑草の種子及穀物を食う。
25	コガラ	四季棲息、稍多数、主として昆虫食、稀に種子を食う。
26	ヤマガラ	四季棲息、稍多数、主として昆虫食、稀に果実を食う。
27	ヒガラ	四季棲息、多数、主として昆虫を食い、往々種子を啄む。
28	シマエナガ	四季棲息、多数、食餌コガラに同じ。
29	キクイタダキ	９月下旬－４月中旬、多数棲息、越冬す。主として昆虫類を食う。
30	モズ	４月－10月、多数、昆虫類、蛙、小禽類を食う。
31	ヒレンジャク	１月中旬－３月中旬、稍多数、ヤドリギの実を食う。
32	エゾヒヨドリ	四季棲息、稍多数、植物の実、昆虫、クモ類を食う。
33	コサメビタキ	４月－９月、稀、トンボ、シヤクトリ虫、其他昆虫類を食う。
34	サメビタキ	極めて少数、昆虫食。
35	キビタキ	４月－11月、多数、主として昆虫食。
36	オホルリ	５月中旬に見た。少数、昆虫食。
37	コムシクヒ	５月－９月、稀、シヤクトリ虫、其他昆虫を食う。
38	ウグヒス	５月－11月上旬、稍多数、昆虫食。
39	シヲサザイ	５月中旬－９月中旬に見た。稍多数、昆虫食。（別名カハリウグヒス、又はヤブサメ）
40	オホヨシキリ	５月中旬－９月初旬に見た。稍多数、昆虫食。
41	トラツグミ	４月中旬－９月、少数、昆虫と僅かに樹果を食う。
42	クロツグミ	５月上旬－10月中旬、稍多数、トラツグミと同じ食物。
43	シロハラ	５月上旬－11月上旬、少数、食物上に同じ。
44	マミチヤジナイ	５月上旬－11月上旬、稍多数、食物同上。
45	アカハラ	５月上旬－10月上旬、稍多数、食物同上。
46	ツグミ	昭和９年９月26日初渡来を見る。林内に越冬するものもある。３月下旬退去。
47	ノビタキ	５月下旬－10月下旬、多数、昆虫食。
48	ルリビタキ	４月下旬に見た。多数（５月下旬より見られない）、昆虫食。
49	ノゴマ	５月下旬に見た。少数、昆虫食。

50	ミソサザイ	冬期及11月上旬、多数、昆虫、クモを食う。
51	ツバメ	5月下旬－9月下旬、少数、昆虫食。
52	ヨタカ	6月下旬－10月下旬、少数、蛾類、蚊、昆虫類を食う。
53	カハセミ	5月中旬－9月中旬、夏期多数、水棲動物を食う。
54	アカセウビン	5月中旬－8月下旬に発見せらる。少数、水棲動物を食う。
55	ヤマゲラ	四季棲息、稍多数、昆虫及びクモを食う。
56	エゾアカゲラ	同上。
57	エゾオホアカゲラ	同上。
58	エゾコゲラ	同上。
59	クマゲラ	四季棲息、少数、昆虫及びクモを食す。
60	アリスヒ	5月下旬に見た。少数、昆虫及びクモを食す。
61	クワクコウ	5月下旬－10月中旬、稍多数、昆虫特に毛虫を食す。
62	ツツドリ	同上。
63	オホコノハヅク	四季棲息、少数、昆虫、鼠及び小鳥を食う。
64	アヲバヅク	6月下旬に目撃す。少数、昆虫、小鳥、鼠その他小動物を食う。
65	キンメフクロウ	昭和9年11月10日発見す。(井上技手)
66	ハイタカ？	オホタカか目下調査中。
67	トビ	四季棲息、少数、昆虫、鼠、魚等を食う。
68	クマタカ	稀。
69	オホワシ	稀。
70	アヲサギ	5月上旬－10月下旬、少数、昆虫、魚、蛙等を食す。
71	マガモ	4月－11月、少数、穀物等を主とした植物性食、往々魚類、ザリガニ、モノアラガイ等を食う。
72	カルガモ	4月－11月、稍多数、タマガヤツリ、モミ、ソバ等を食う。(井上技手観察)
73	コガモ	マガモに同じ。
74	ヲシドリ	同上。
75	カイツブリ	4月－10月、少数、小エビ、稚魚、水棲昆虫を食う。
76	キジバト	稀に越冬するものもあるが、大部分は退去す。3月下旬渡来－12月辞去。 多数、穀物、種子及び木の芽を食す。
77	アヲバト	6月上旬－10月初旬、少数棲息す。
78	ヤマシギ	5月上旬－10月に少数を見た。昆虫食。
79	クヒナ	5月上旬に少数を見た。
80	エゾライチフ	四季棲息、稍多数、木の芽、蕾、笹の筍、種子、果実を食う。

ラスと呼ばれていたことが伺える。37番目のコムシクイは今のコメボソムシクイのことである。また、39番目のシオサザイの説明に、別名カワリウグイス又はヤブサメと記されているが、むしろ当時から正式名はヤブサメで、別名シオサザイというのが正しいようである。ちなみに山階芳麿著「日本の鳥類と其の生態」(1941)には、ヤブサメの記載のところに、「尾をあげながら活発に笹の間を潜行するところはミソサザイに似ている。昔から焦茶色のミソ(味噌)サザイに対し、白味勝ちな本種をシオ(塩)サザイと呼んだのも面白いことである。」(原文一部変更)と書かれている。

個々の鳥類については、特に53番目のカワセミの説明に「夏期多数」と書かれているのが目を引く。カワセミに限らず、ヨタカ、アカショウビン、オオコノハズク、アオバズクなどが殆ど見られなくなってしまったのは、決して今からそれほど昔のことではないであろう。なお、65番目のキンメフクロウはもしかしたらこれが野幌における最後の記録かもしれない。故柳沢信雄氏による「野幌森林公園の鳥」(野鳥だより第40号、1980年)にも、この記録が唯一のものとしてあげられている。また、コガラは記載されているが、ハシブトガラは記載されていない。この似たものどうしは、当時はすべてコガラとされていたものと考えられる。

昭和11年といえば1936年、今から65年前である。ご高齢の方の中には当時の野幌の様子をご記憶されている人もいるかもしれない。愛護会の野幌探鳥会は1970年からであるから、その時にはもう既に当時と比べて森林の状態、野鳥生息状況にかなりの変化があったものと推察される。タイムマシンというものがあったならば、昭和初期に遡って探鳥会を開催し、物故された会員の方々にも来ていただき、参加者一同でアカショウビンの声でも聞きながら、野幌原始林の今昔を語り合いたいものである。

野鳥愛護会のホームページについて

高 橋 良 直

前号の会報「野鳥だより」でお知らせしましたが、本年8月に本会のホームページ（以下「ＨＰ」と略します。）を開設しました。このＨＰについて少しばかり書かせていただきます。

私は、愛護会には昨年の5月に入会したばかりの、会員としてはまったくの新米会員ですが、入会した頃から会のＨＰがあればいいと思っていました。もともとコンピュータ関係に詳しいわけではなく、ＨＰ作成の経験があったわけでもありません。あるときＨＰ作成の入門書を買ってきて、指示どおりに作成例を作ってみましたら、思ったよりも簡単にできてしまい、これなら私にでも会のＨＰを作れるかなと思うようになりました。その後広報代表の樋口さんにＨＰ作成を提案したところ、幹事会でも大賛成ということで、4月から作業に取りかかり、若干の悪戦苦闘を経て8月1日に開設という運びとなったものです。アクセス件数は開設後少しずつ増え、最近では毎日40件を超えるアクセスが切れ目なく続いており、たいへんうれしく思っています。

ＨＰ作成にあたって念頭に置いたことは、会員間のコミュニケーションが活発になるようなものにするということ、また、会の存在を広く道内外にアピールできる内容にするというようなことでした。このため、ＨＰの内容としては、探鳥会予定や観察記録は当然として、特に掲示板とフォトギャラリー、探鳥地紹介を特色あるものにしたいと考えました。以下この3点について意図していることに触れ、会員の皆様の一層のご協力を得たいと思います。

＜掲　示　板＞

初心者であれベテランであれ、鳥を見てなにがしかの感動を受ければ、それを誰かに伝えたいと思うものです。私自身がそういった感動を自由に書き込みできる掲示板のようなものがほしいと思っていました。多くのＨＰには誰でも投稿ができる掲示板が設けられていますが、本会のＨＰでは、ＨＰの主宰者との私的なやりとりを楽しむということではなく、基本的に情報を書き込むだけということを想定し、「野鳥情報伝言板」と名付けています。探鳥地に出かけた際の情報に限らず、ごく身近で今年もツグミが来たとか、ウグイスが鳴いたというような情報もおおいに歓迎したいと考えています。詳細な記録である必要はありません。今のところ投稿者はまだ特定の方に、話題も道央圏に限られているようです。各地の会員の方もどうぞ気軽に投稿してくださるようお願いします。

留意したいことは、インターネットによる野鳥情報の伝達は「両刃の剣」だということです。情報通信の迅速化、多様化は今日めざましいものがありますが、いわゆる「珍鳥」の情報に多数の人が集まる結果、野鳥の生息に悪い影響を及ぼすという例もしばしば生じています。この「伝言板」は会員以外の誰でも見ることができる設定にしています。「珍鳥」や繁殖中の野鳥の情報は慎重にお願いします。

また、多くの方にこの「伝言板」に親しんでいただくため、一般になじみの薄いインターネットの世界特有の略語、俗語などはできるだけ使わないようにしていただきたいと思います。さらに、これは「伝言板」に限ったことではありませんが、鳥名の略称（「ハイチュウ」、「ビロキン」など）も、初心者や一般の方に対して鳥関係の団体が特殊な、近づきにくい世界であるかのような印象を与えかねませんので、使うべきでないと思っています。

＜フォトギャラリー＞

会員の中には野鳥の写真を撮られている方も多数おられると思いますが、作品を発表する場は個人でＨＰを設ける以外にはあまりないのが実情でしょう。特定の会員の作品を紹介するのではなく、いわば「会員参加型」のギャラリーを作ることは、ＨＰの開設にあたって当初からの構想でした。表情豊かな生き生きした写真、あるいは生息する環境をも写し込んだ情緒豊かな写真を集めたいと考えています。新米会員ですから、私が存じ上げない会員で写真を撮られている方も多いと思います。写真の点数はいくらでも増やせますので、どうぞ積極的に作品をお寄せいただくようお願いします。

＜探鳥地紹介＞

最後に「探鳥地紹介」のページについて触れます。ＨＰの作成作業中に本会の30周年記念誌が刊行されましたので、定例探鳥地については、この記念誌の探鳥地の紹介記事とイラストマップを活用することができました。それ以外の探鳥地については、「野鳥だより」に掲載されたものの中から転載しています。将来的には全道の主な探鳥地を網羅するくらいのものにし、道外の方からも活用されるよう充実させていきたいと考えています。

今後新たな内容のページを増やしていくこともできますので、こんな情報がほしいといった要望やご意見など遠慮なくお寄せください。

〒006－0851　札幌市手稲区星置1条6丁目8－1
☎ 011－685－6363

会員の札幌市集中化傾向について

広　報　部

過日、会員の皆様には平成13年（2001年）の会員名簿をお届けしましたが、それを機会に、愛護会設立当初と現在の会員の地域別分布状態を比較してみました。設立当初の1970年と、2001年（10月１日現在）の会員数を、それぞれ札幌市在住、札幌市を除く石狩支庁在住、他の13支庁在住、道外在住とに分けました。最近は家族会員が多くなってきていますが、ここでは１家族も１名としています。

もっとも顕著なことは、会員分布が札幌市に偏ってきたことです。図１を見てすぐわかるように、設立当初に比べて札幌市在住の会員数が倍以上に増えているのに対し、石狩支庁以外に在住の会員数がほぼ半減しています。札幌市を除く石狩支庁在住の会員数が増えているのは、おもに江別市在住の会員増によるものです。なお、道外在住の会員が増えたのは、道外転出後も引続き会員を続けている人が多いためと思われます。道内在住の会員について比率を見てみますと、図２のように、設立当初には全体の３分の１ほどだった札幌在住の会員が、今や３分の２を占めているのに対し、石狩支庁以外の会員が、かつての過半数から、２割強にまで減少しています。

設立時には広く全道に会員を求め、会員のもっとも少ない支庁でも５名はいて、文字通り全道組織であったのですが、その後各地に日本野鳥の会の支部などがつくられたこと、愛護会の探鳥会が札幌周辺を中心として行われていることなどもあって、札幌市とその周辺以外の方々が随分と少なくなってきてしまいました。2001年10月現在で、多いところで空知の16名、胆振の12名、少ないところでは桧山と日高のそれぞれわずか１名のみとなっています。

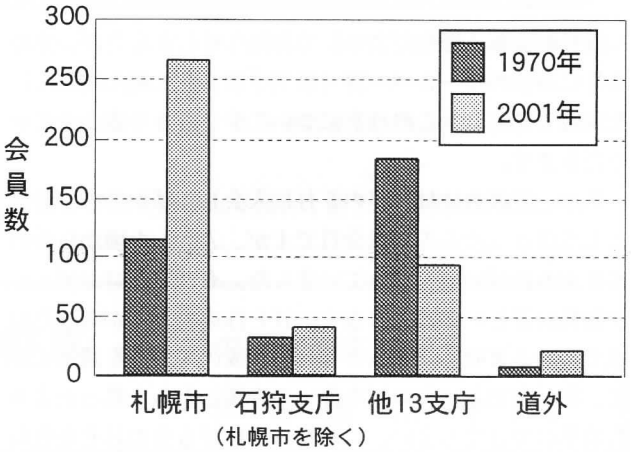


図１　1970年と2001年の地域別会員数

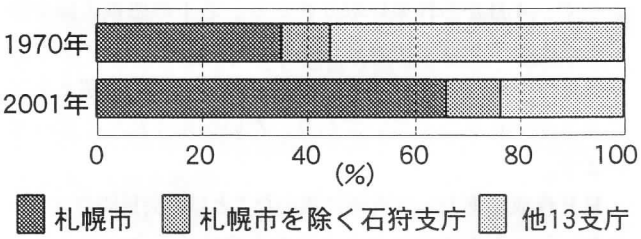


図２　1970年と2001年の地域別会員数の比率

愛護会が全道組織としての体裁を維持するため、また広く全道各地からの鳥情報などを募るためには、石狩支庁以外の会員の増加を諮る必要があります。広報活動の活性化に努めるつもりですが、現会員の皆様のご協力も欠かせません。どうぞよろしくお願いします。

鳥と野の花と

鵡川探鳥会

2001. 8.19

川　東　知　子

バードウオッチングを楽しむようになって２年目の、新入会員です。

もともとのんびり野山を歩くのが好きで、花には足を止め、名前も気になるのですが、鳥となるとみんなまとめて“鳥”ですませていました。それが西岡のエサ場で鳥達を目のあたりにしてから、双眼鏡を持ち歩くことが多くなり、今では目線を上へ下への忙しい野歩きになりました。自宅近くの公園でオオルリやイカルを見たり、通勤途中の街路樹でコンコンやっているアカゲラを見つけたり……。ごく近か間で、１人でも楽しむことができるようになったのは、探鳥会に参加した成果でしょうか。

水辺の鳥は機会が少ないせいもあって、なかなか覚えられません。

５月20日、鵡川の探鳥会でのこと。

まわりのみなさん「お、チュウシャクだ」

わたし　　「え、チュウヒ？」

といった具合です。

ハヤブサの堂々たる姿はよかった。なんといってもクマどった顔が「わたしはハヤブサだ！」と教えてくれているようで気に入りました。

８月19日、鵡川の探鳥会。今度はシギ・チドリの姿を本

で予習したつもりでしたが…。なにせ、みんな遠い！はるかかなたの豆状態です。スコープを見せていただいても、説明を聞いてもいまひとつピンときません。どの鳥も色が似ていて、地面や水面に溶け込んでいて。個体色のはっきりしない者まで出てくるし…。あれではわかっている人にしか、わからないのではないでしょうか。

ちょっと満たされない気持の帰路、エゾキツネアザミののびやかな姿やイシミカワの微妙な色合の実を目にして、気を取り直したのでした。

私も早く“知っている人”の１人になって、水鳥も楽しみたいと思っています。よろしくお願い致します。

〒004－0878　札幌市清田区平岡８条４丁目５－17

【記録された鳥】カイツブリ、ウミウ、アオサギ、トビ、チュウヒ、オオタカ、ハヤブサ、ヒシクイ、マガモ、カルガモ、ムナグロ、オオソリハシシギ、ソリハシシギ、イソシギ、トウネン、ウミネコ、オオセグロカモメ、カワセミ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ハクセキレイ、ノビタキ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス　以上　28種

【参加者】赤沼礼子、岩崎孝博、うすだ、岡田幹夫、小山内恵子、片山　實・慶子、門村徳男、川村宣子、蒲澤鉄太郎・則子、川東保憲・知子、岸谷美恵子、木村与吉、小山久一、佐藤幸典、佐藤正秀、島田芳郎・陽子、高橋良直、戸津高保・以知子、中正憲佶・弘子、長尾由美子、成澤里美、畠中準裕、林、樋口孝城、村上トヨ、松原寛直・敏子、山形裕規・郷子・麻里亞、山口和夫、山本昌子、鷲田善幸　以上　39名

【担当幹事】佐藤幸典、樋口孝城

ハ　ヤ　ブ　サ

鵡川探鳥会感想文

2001. 9. 2　山　口　裕　彦

今冬に自宅の庭にリンゴを置いておくと「ヒヨドリ」が食べにきました。いままで身近で見る鳥はスズメ、カラス、ハトぐらいでしたが、ヒヨドリを近くで見て、こんなに愛らしく、もっと野鳥のことを知りたいと思っておりました。新聞で探鳥会の案内記事をみて、鵡川河口附近の探鳥会に始めて参加しました。

私が双眼鏡で知り得たのは10種類でしたが何んと30種の鳥がいたそうです。その中でも写真でしかみたことのない「カワセミ」を目前で観察することができました。背の羽根の青はとてもきれいな青で感動しました。探鳥会の皆さんもこんな近くで見たのは始めての話を聞いて、初回で見れたことはラッキーでした。また、機会があれば参加したいと思っています。

〒004－0014　札幌市厚別区もみじ台北５丁目

【記録された鳥】ウミウ、アオサギ、トビ、オオタカ、ハヤブサ、ヒシクイ、コガモ、マガモ、カルガモ、アオアシシギ、ソリハシシギ、イソシギ、トウネン、ハマシギ、ウミネコ、オオセグロカモメ、キジバト、カッコウ sp. カワセミ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ツバメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ノビタキ、コヨシキリ、カワラヒワ、スズメ、ハシボソガラス、ドバト　以上　30種

【参加者】村上トヨ、田中哲郎、高栗　勇、遠藤美浩、川東保憲・知子、勝見輝夫・真知子、小山内恵子、山口和夫、岸谷美恵子、関口健一、山口裕彦・潤子、鷲田善幸、松原寛直・敏子、世永正明、佐藤幸典、高橋良直、岡田幹夫、山本昌子、板田孝弘、佐藤ひろみ、山下　茂、戸津高保・以知子、島田芳郎・陽子、山田良造、石田典也、登野泰信　以上　32名

【担当幹事】戸津高保、佐藤ひろみ

宮島沼探鳥会に参加して

2001.10.14　内　山　正　裕

私はバードウオッチングをはじめて日が浅く、本愛護会に仲間入りさせて頂いて１年余りのいわゆる初心者です。探鳥会に参加して心がけていることはまず多くの鳥を見ること、私自身で確認できる鳥の数が鳥合わせ時の鳥数に近づけること（見落としがあり、確認率をあげる）、第三に今まで見たことのない鳥に出会えることの３点を私のレベルに合わせて設定しています。

〈ハクガン出現〉

ところが今回の宮島沼の探鳥会ではこれらの観点にない大変貴重な場面に出会いました。第一にハクガンの飛翔が見られたこと、さらに成鳥および幼鳥が確認できたことでした。宮島沼には約３万羽のマガンが飛来とのことでしたが、多少は給餌場に行っている様でした。担当幹事から今ハクガンがきており、しかも幼鳥もおりこれは珍しいことと説明されていました。探鳥会が始まって１時間たって突然東の彼方から大きな群れが来て、その中にハクガンしかも幼鳥が混じっており、周囲が歓声の声をあげているうち、

次の大群の中にハクガン（成鳥）が飛来してきた。驚きの声はさらにアップ、やがて着水した。ここからが大騒動で、ベテラン諸氏の方々の巧みなプロミナ操作によりほぼ全員が成鳥、幼鳥の確認ができました。なぜハクガン（*Anser caerulescens*）がマガン（*Anser albifrons*）と行動をともにするのか－－－どちらもマガン属（ANSER）のためかと勝手に解釈した次第です。ハクガンの記録はごく少数となっており、今回は大変貴重な鳥に出会うことができました。

第二にタカ科及びハヤブサ科の鳥が見られたことであります。特にチュウヒ、ハヤブサが獲物をねらって飛翔する姿は見事な光景でした。また向こう岸の樹上にオオタカ、オジロワシの悠然ととまっている姿も目にとまっていて猛禽類はいつ見ても感動ものです。

そのほかカンムリカイツブリやダイサギなど大型の水鳥も観察できました。カンムリカイツブリは今回はじめてみましたのでさっそく“My Records”（個人的な記録シートで鳥名、学名、分布などを記入）にまとめました。

さて私のバードウオッチングは冒頭の3点の視点のほか、はじめてからすぐいろいろと興味なり疑問が出てきたというより、まったく未知の分野です。道内で見られる鳥の種類かどうか、鳥の大きさと鳥の種類の関係（鳥数Nと体長Lの関係）など図鑑等を参考に調べてみました。

来年は3年目に入りますので次段階への足がかりとすべく当面のテーマに取組み中です。例えば確認率をさらに高める工夫、分布や生息状況をさらに把握すること、さらに渡りのルート、仕組みの把握や進化の問題など尽きません。最近の資料によりますと鳥の先祖は恐竜であるという説が話題になっていますが。各テーマについて諸資料を参考にし、私なりの基礎資料にまとめながらバードウオッチングを楽しんでいきたい。

今回の探鳥会では大変貴重な状況が見られました。そして案内頂いた担当幹事さん、親切丁寧に説明して頂きましたベテラン諸氏の方々に感謝致します。

いつまでもマガンはじめ多くの鳥が宮島沼に出現するよう願って感想とします。

〒069－0841　江別市大麻元町164－39

【記録された鳥】カイツブリ、ミミカイツブリ、ハジロカイツブリ、カンムリカイツブリ、ダイサギ、アオサギ、トビ、オジロワシ、チュウヒ、オオタカ、ハヤブサ、マガン、ハクガン、ヒドリガモ、コガモ、マガモ、カルガモ、オナガガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、ミコアイサ、ツルシギ、ムクドリ、ハシボソガラス、鳥合わせ直後コハクチョウ、ヒヨドリ、カケス　　以上　28種

【参加者】内田　孝、村上トヨ、岸谷美恵子、長尾由美子、片山　實・慶子、鈴木繁雄・英子、島田芳郎・陽子、井沢了・明美・夏海、佐藤幸典、岡田幹夫、戸津高保・以知子、汐海喜代恵、内山正裕、岩崎孝博、広木朋子、品川睦生、橋爪陽子、河端真寿美、栗林宏三、武沢和義、西川孝義、北尾久美子、高橋良直、松原寛直、亀井厚子、藤原伸彦、石田典也、鈴木正之、今泉秀吉、田宮ひろ子、白澤昌彦、樋口孝城・陽子、田辺　至、蒲澤鉄太郎・則子、井上公雄　以上　44名

【担当幹事】樋口孝城、岡田幹夫

野幌森林公園の探鳥会に参加して

2001.10.21　西　村　華　子

ウオッチングガイドをみて、二度目の参加をしました。

始めて参加した福移の探鳥会では、沢山始めてみる鳥を教えて頂き、感激しました。今回も期待して参加しました。でもハッキリ自分で確認出来たのは、シジュウカラ、ゴジュウカラ、コゲラ、カケス、ハシブトガラ位でした。大沢の池でみんなが、アオアシシギとかツルシギとか騒いでいましたが、全然わからず、まわりの景色をみていました。紅葉まっさかり、天気もマアマアで、つばめおもとやまむし草のきれいな実をみて楽しんでいました。鳥はこの次のめぐりあいに期待して又、参加させて頂きたいと思います。

〒002－8007　札幌市北区太平7条6丁目4－1

【記録された鳥】カイツブリ、トビ、マガモ、ツルシギ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒラドリ、ツグミ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、カシラダカ、アオジ、カワラヒワ、ベニマシコ、ウソ、カケス、ハシブトガラス　　以上　22種

【参加者】瀬賀勝人、西村華子、佐伯武美、品川睦生、中正憲佶・弘子、戸津高保・以知子、松原寛直・敏子、山川美香、香川　稔、岡田幹夫、赤沼礼子、今村三枝子、大西典子、鎌田玲子、小西芙美枝、安真一郎、佐々木　裕、富川　徹、登野泰信、石田典也、浪田良三、長尾由美子、長谷孝一・奈緒美、田宮ひろ子、沢田浩一、吉田慶子、小堀煌治、大賀　浩、斉藤正雄、井上公雄　　以上　34名

【担当幹事】富川　徹、中正憲佶

探鳥地風景　野幌

【小樽港】 2002年1月20日（日）

小樽港湾とその周辺で見られる海カモ類を観察するのがこの探鳥会の主な目的です。アビ、オオハム、アカエリカイツブリ、ハジロカイツブリ、ウミウ、ヒメウ、シノリガモ、コオリガモ、ウミアイサなどのほか、各種カモメ類ハヤブサ、オジロワシなどの猛禽類も良く観察されます。

日和山灯台の近く祝津漁港、高島漁港、小樽港内の埠頭岸壁などの各観察ポイントを、貸切りバスで辿りながらの探鳥会ですので多くの海鳥を観察することができます。

なおバスを利用しますので申込制になります。

集　合＝ＪＲ小樽駅待合室　9時30分

申込先＝白澤昌彦宅（011）563－5158

午後6時～8時30分間にお願いします。

締　切＝1月13日（日）まで

参加費＝1,000円程度の予定です。当日受付の際にお納めください。

【野幌森林公園】 2002年2月3日（日）

最も厳しい季節の中でコゲラ、アカゲラ、ハシブトガラ、エナガ、などの留鳥が逞しく活動をしています。冬鳥として渡って来たキレンジャク、ツグミ、アトリ、マヒワなどの他にカケスやハイタカ、オオタカ、フクロウなどに出会えるよう期待したいものです。

集合＝午前9時　大沢口駐車場入口

交通＝有鉄バス（文京台線）新札幌駅バスターミナル発「文京台西行き」大沢公園下車徒歩5分

【円山公園】 2002年3月3日（日）

日中の日差しにも春が感じられる季節を迎えています。厳しい冬を生き抜いた野鳥たちは、春の訪れを待ち焦がれたように活発な動きを見せ、囀りをはじめるものもいます。観察の中心がツグミ、アトリ、キレンジャク、ヒレンジャク、マヒワ、ウソなどの冬鳥に、キツツキ類、カラ類などの留鳥になりますが、南で越冬していたカワラヒワも姿を見せはじめる頃で、20種前後が観察記録されるものと思われます。

集合＝午前9時　円山公園管理事務所前　午前中解散

交通＝地下鉄東西線　円山公園駅下車徒歩3分

【ウトナイ湖】 2002年3月24日（日）

日本各地やさらに南で冬を過ごしたガン・カモ類がこの時季群れをなして北の繁殖地を目指して渡りをはじめます。ウトナイ湖はこれらの渡りの鳥の中継地として賑わいを見せています。ヒシクイ、マガン、オオハクチョウなどの他、コガモ、ハシビロガモ、キンクロハジロ、ホオジロガモ、ミコアイサなどのカモ類、オジロワシ、オオワシなどが観察されます。温かい身支度に配慮してご参加ください。

集合＝午前9時30分　ウトナイ湖畔駐車場湖畔側

交通＝道南バス（苫小牧行き）新千歳空港発～ウトナイ湖畔駐車場下車徒歩2分

☆交通機関を利用される方は、各自でお確かめください。

☆昼食、雨具、観察用具、筆記用具をお持ちください。

☆何れの探鳥会も余程の悪天候でない限り行います。

☆探鳥会の問い合わせは

011－563－5158　白澤さん宅へ

鳥民だより

◇新年講演会のご案内

新年講演会を下記の要領で開催いたします。

・日時：平成14年1月12日（土）　13：30～

・場所：札幌市女性センター

札幌市中央区大通西19丁目

・講師：大館和広氏

1958年紋別市鴻之舞生まれ。郵便局勤務。

もんべつかいはつくらぶ代表。鳥類標識調査員。北海道自然保護協会理事。

「コムケ湖の鳥はどこから来るか？」など、コムケ湖を主体に渡り鳥などの鳥類調査をライフワークとし、それらを通して自然を見つめ生息地保護の重要性を唱えています。とりわけ、シギ・チドリ類の調査においては全国でも数少ない研究者の一人として、これまでの調査・研究の業績も多い。

「鳥はいったいどこから来て、どこに行くのだろう？」実際の記録などから、渡り鳥中継地という役割とその重要性、そして現状における課題や今後の取り組みなどについて、魅力ある話術とスライドなどでお話を受けます。また、参加者との楽しいコミュニケーションの場も楽しみです。

・演題：「コムケと言えばシギ・チドリ」

－見せます、出します、教えます－

・スライド映写

皆さんの持ち寄ったスライドを映写します。たくさんの作品の参加をお待ちしています。

・会費：500円の予定です。

◇写真展の作品を募集します

平成14年度も野鳥写真展を開催します。場所は光映堂フォトギャラリー（札幌市中央区大通西3丁目）で、5月8日から5月20日までの予定です。次号でもあらためてお知らせしますが、奮ってご参加下さい。

◇会費納入のお願い

平成13年度会費を未納の方は、できるだけお早めに納入ください。愛護会の健全運営は会費の順調な納入にかかっています。

◇野鳥だより原稿を募集しています

北海道各地の探鳥地紹介、野鳥観察記録、野鳥に関する話題などの原稿を募集しています。「私の探鳥地」、「私と野鳥」など、身近な話題も歓迎です。「野鳥だより」についてのご感想やご批判、また「こんな記事を載せてほしい」といったご要望もお寄せ下さい。

原稿の送付、投稿のご相談などは、広報代表・樋口孝城
〒002－8065　札幌市北区拓北５条２丁目10－17
電話011－771－4470までお願いします。

☆☆☆ 会　員　名　簿 ☆☆☆

【新しく会員になられた方】

畑澤民之助　〒046－0121
古平郡古平町浜町478

広中　英生　〒053－0035
みどり　苫小牧市高丘６－12　B－305
梓二

砂金　義人　〒003－0029
札幌市白石区平和通１丁目北16－21
パークサイド平和通201号

鏡谷　光司　〒003－0027
札幌市白石区本通６丁目
北５－１－１－107

久保　清司　〒089－5617
十勝郡浦幌町字南町３－35

野呂　一則　〒089－5865
十勝郡浦幌町厚内

石田　典也　〒005－0002
札幌市南区澄川２条４丁目14－10
ユアーズ澄川401号

汐海喜代恵　〒004－0867
札幌市清田区北野７条１丁目６－10

瀬賀　勝人　〒004－0878
札幌市清田区平岡８条２丁目９－１

大橋　弘一　〒061－0042
札幌市中央区大通西11丁目４－27
ダンケ大通ビル６Ｆ

大荒田忠良　〒068－0803
岩見沢市南町３条２丁目２－12

「私たちの探鳥会 探鳥会30年の記録」の経過報告

６月に124号と一緒にお届けした「私たちの探鳥会 探鳥会30年の記録」は、1,000冊発行しました。

約800冊を会員の皆様を始め、関係機関に配布の他、新聞、関係機関紙にも紹介されて、全国の野鳥愛好家から多数の購入の申込みがありました。懸念された予算面でも、編集者をはじめ関係者のご努力により、なんとか赤字を出さない見込みとなり、ありがとうございました。

まだ若干余部がございます。ご希望の方は、会計の蒲澤まで、**電話（011－663－9783）**でお申込みください。会員の皆様には特別価格でお届け致します。

なお決算報告は、総会後の野鳥だよりに掲載致します。

フ　ク　ロ　ウ

フクロウは野鳥愛護会のシンボル鳥です。北海道のフクロウは亜種エゾフクロウです。夏期間は山地の森林にいるので、ほとんど見られませんが、冬になると平野部の森林に降りてきます。野幌森林公園では探鳥会の集合場所である大沢口入り口から入ったすぐ左手の大きな樹の洞のところに、よくとまっており、12月２日の探鳥会でも観察されました（写真参照、記録は次号）。他の場所でも見られることがあります。じっとしている上に、樹と同じような色ですから、たとえいたとしても見逃してしまうかもしれません。「怪しげな塊」があったら注意して見てみましょう。

〔北海道野鳥愛護会〕　年会費　個人2,000円、家族3,000円（会計年度４月より）　郵便振替 02710－５－18287
〒060－0003　札幌市中央区北３条西11丁目加森ビル５・六階　北海道自然保護協会気付　☎（011）251－5465
HPのアドレス　http://homepage2. nifty. com/aigokai/